

令和2年12月1日

太田市議会 議長 久保田 俊 様

立憲民主党 代表 神谷 大輔

行政視察報告書

- 1 視察日 令和 元年 11 月 14 日
- 2 場所 東京都千代田区丸の内三丁目 8 番 3 号 東京スポーツスクエア
- 3 参加者 神谷 大輔
- 4 視察内容 地方議員及び自治体職員を対象とした、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた「大会直前期の盛り上げと大会後のレガシー」をテーマとしたシンポジウム
- 5 目的 上記大会のホストタウンであり、JOC（日本オリンピック委員会）パートナー都市でもある本市において、大会への参画を、長期的視点で、有機的に活かしていくための調査・研究
- 6 所感 大会直前期を迎えるにあたり、とりわけ「大会後」についての考察の機会として、本シンポジウムの開催の意義は大きいととらえられました。本市においても、ホストタウンとしての事前活動や、オリンピックデーランの開催を通じ、市民の皆様に対し、大会への気運の高揚が果たされている中、「大会後」についても考えていくことの意義と、そこで、果たされるべき施策への反映を考えていくことの重要性を認識することができました。

視察内容

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたシンポジウム
テーマ「大会直前期の盛り上げと大会後のレガシー」

○冒頭、小池百合子都知事より、本大会におけるパラリンピックをスプリングボードとして、バリアフリーのまちづくりに取り組み、その質の向上を図っていくとの話があり、また、鈴木良一東京都議会議長より、本大会は、アスリートのものでなく、それぞれの地域の皆様が、アスリートと交流し、そうした活動を通じて、地域の振興につなげ、日本の各地に「レガシー」を残していくことを大会の意義とするとの話がありました。両氏の話からは、大会を一過性のものに終わらせず、大会後も、日本社会に、「オリンピック効果」をもたらしていきたいとする強い意気込みが伝わりました。

○大会直前期の盛り上げということで、組織委員会から聖火リレーについて、パートナー企業として、日本コカ・コーラ株式会社担当者より、パートナー企業の関わりについて説明がありました。さらに、組織委員会 企画財務局アクション&レガシー部長より、「東京 2020 参画プログラムについて」と題して、地方自治体・スポーツ関連団体・経済関連団体等にとどまらず、自治会・町内会・商店街等も対象として、コンセプトと要件を満たすことで、「オリンピック」「パラリンピック」等の呼称や公認マークの使用を認めるとするプログラムについての説明があり、国民の本大会への参画意識向上への取組みについて理解を深めることができました。

○その後は、「2020年とその先へ向けた取り組みのアイデア」をテーマとしてパネルディスカッションがあり、「盛り上げた先」についての考察が進められました。レガシーは、「みえるもの」と「みえないもの」に分けられ、そのまま、ハードとソフトに区分されるとされ、スポーツを視点にソフトレガシーを考えていく必要があるとされました。

パネリストの一人であり、5度のパラリンピックに出場し、計20個のメダルを獲得した成田真由美氏から、障がい者であり、アスリートである自分に何ができるか、何をもちたすことができるかを考えながら、活動しているとの話がありました。子どもたちとの交流を通じて、当初は、「障がいを抱えていてかわいそう」という子どもたちの意識が、交流を深めていくことを通して、先をあらそうように、手伝いを申し出てくれようになり、さらには、頼まれずに、自主的に手伝うようになってくれ、自分が相手に対し、何ができるのかを考えるようになることでした。

日本各地が、本大会への参画を通じて、競技やアスリートへのさらなる認知を、ちいきづくりに活かしていけるよう取り組みを考えていくことが重要であり、それが、本大会の真の成功であるということについての理解を深めることができました。